

池田憲彦氏に聴き、語り合う
日本の大学～“肉眼”による“近代史認識”を通しての“再構築”
 ～『近代日本の大学人に見る世界認識』をテキストとして～

2006年8月4日(金)

講師 池田 憲彦氏 / 前拓殖大学創立百年史編纂室主幹
 同大日本文化研究所近現代研究センター長

時間	講義項目
13:00 ～ 13:40	[第1部]『拓殖大学創立百年史編纂事業の態勢と成果』 ・編纂作業の態勢 ・アウトプット ・中間総括 質疑応答
13:50 ～ 15:50	[第2部]『近代日本の大学人に見る世界認識』 ～1945年における世界認識の転換～ ・問題意識と本書刊行の意図 ・台湾協会学校・初代校長 桂太郎の他者認識 「我能く彼を知ると共に、彼亦我を知る」 ・後藤新平のエスニック観 「比良目の目を鯛の目にするにはできんよ」 ・新渡戸稲造 国際開発とその教育の先駆者 「東西文化の天職的発達と融和を望む」 ・地域・地球事情の啓蒙家 満川龜太郎の時代認識 「民族生活の科学的根基を鞏固ならしむる」 ・自然体の伝道者 青嵐永田秀次郎 「世界は人間の為に造られたるものではない」 ・永雄策郎 近代日本の植民政策家 「肉眼の育成を無視して心眼の育成はあり得ない」 ・満州移住 大蔵公望の経緯と宇垣一成 「この形勢は外国に関係ない間はどうでも良いが」 質疑応答
15:50 ～ 16:40	[第3部]『文装的武備としての21世紀の日本の大学と私学を考える』 1. 現代日本人の世界認識 2001年9月11日の“開戦”が問う世界の構造 アジア・太平洋における日本のプレゼンス 2. 日本の大学の“国際化”戦略の再構築 多文明・異文化の断層線の研究 “地球社会”の中での日本人の自己形成 質疑応答

開催にあたって

1992年は、学制120年の節目の年でした。大学にとっても、百年を単位としたアーカイブズの集積と大学史の編纂がスタートし、かつ継続されております。20世紀において、特異な近現代史を経た日本の諸大学が、自らの軌跡を振り返る営みは、21世紀の高等教育の在り方を模索するに際しても、必要不可欠なものであります。

各大学から、分厚い成果品が産み出されております。しかしながら、この間の大学審議会や中教審大学分科会の審議や政策シナリオに貢献するアウトプットは未見であり、骨太な大学人の登場もありません。

さて、今回のホスト講師の池田憲彦氏は、拓殖大学創立百年史編纂室に創設時から9年間在籍され、異色な編纂事業を企画運営し、その統括の任を務められました。昨年3月に離任したのを機に、標記の書を書き下ろし、上梓されました。

1900年に創設された台湾協会学校から始まる拓殖大学の百年史は、近代日本における高等教育とその国際化がどのように展開し、大学人と大学教育がいかなる役割を果たしたかについて、鋭い光芒を放っております。

そこで、拓殖大学の編纂事業の態勢と成果についての、04年度末までの中間的総括及び、拓殖大学の大学史像が何を浮上させ、21世紀の大学と大学人に問いかけるもの、をテーマに池田憲彦氏を囲むゼミナールを開催いたします。